

---

# 機動戦士ガンダムコピ砂漠第12司令部MS搭乗部隊

天狐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダムコビ砂漠第12司令部MS搭乗部隊

### 【Nコード】

N8155Y

### 【作者名】

天狐

### 【あらすじ】

今は西暦3002年人類はほとんど宇宙に移住した時代、だが宇宙に行けた分食料が足りなく成って行った。そして：人類たちは地球軍『地球覇権軍』と宇宙のコロニー（宇宙C・T）に別れて戦争を始めた。最初はマシンガン、砲台、爆弾などの人が戦地に行き戦ったが…。地球覇権軍が研究段階のMS<sup>モビルスーツ</sup>を導入。

MSとは人間が乗り動かす事のできるロボットと行ったところだ、だが普通のロボットとどう違うかと言うと動力が人口的に戦闘用に作り出された細胞と言うところである。

何故細胞が兵器になるかと言うとすごいスピードで細胞が相手の兵器または細胞を破壊していくからだ。

そして、MSを導入した地球覇権軍は圧倒的だった、だが覇権軍がMSを導入した頃ある宇宙のコロニーで

K・Yミノフスキーと言う人物が古い研究書を軍に届けていた。

そこにはミノフスキー物理学と書かれていてなかにはミノフスキー粒子のことが全て書かれていた。

その資料が届けられて一週間後戦場にC・T軍もMSを導入戦場にはもう人はMSに乗っている人間意外居なくなつた。

その地球の戦場の一つにコビ砂漠と言う砂漠があつた。そこには地球上で一番食料が生産される工場があつた。

まあ当然そんなに大量の食料が生産される場所なのでコビ砂漠には18もの軍事司令部があつたがMSがあるのはそのうちの半分だ、そして極秘だがコビ砂漠の北の方にMS生産所もある。その近くにあるのが第12軍事司令部だ今日覚めた彼はここで働いてる。

彼の名はシンザイ・R・ベリス16歳で軍に入隊その後もすごい才能でMS部隊員にまで上りつめた天才だ。

この話はそんな少年の部隊活動を見ていく話である。

## ? No・zero? あらすじ

今は西暦3002年人類はほとんど宇宙に移住した時代、だが宇宙に行けた分食料が

足りなく成って行つた。

そして…人類たちは地球軍—《地球覇権軍》と宇宙のコロニー（宇宙C・T）に別れて戦争をし始めた。

最初はマシンガン、砲台、爆弾などの人が戦地に行き戦つたが…。地球覇権軍が研究段階のMS<sup>モビルスーツ</sup>を導入。

MSとは人間が乗り動かす事のできるロボットと行つたところだ、だが普通のロボットとどう違うかと言うと動力が人口的に戦闘用に作り出された細胞と言うところである。

何故細胞が兵器になるかと言うとすごいスピードで細胞が相手の兵器または細胞を破壊していくからだ。

そして、MSを導入した地球覇権軍は圧倒的だった、だが覇権軍がMSを導入した頃ある宇宙のコロニーで

K・Yミノフスキーと言う人物が古い研究書を軍に届けていた。

そこにはミノフスキー物理学と書かれていてなかにはミノフスキー粒子のことが全て書かれていた。

その資料が届けられて一週間後戦場にC・T軍もMSを導入戦場にはもう人はMSに乗っている人間意外居なくなった。

その地球の戦場の一つにコビ砂漠と言う砂漠があった。

そこには地球上で一番食料が生産される工場があった。

まあ当然そんなに大量の食料が生産される場所なのでコビ砂漠には18もの軍事司令部があったがMSがあるのはそのうちの半分だ、そして極秘だがコビ砂漠の北の方にMS生産所もある。

その近くにあるのが第12軍司令部だ今日覚めた彼はここで働いてる。

彼の名はシンザイ・R・ベリス16歳で軍に入隊その後ものすごい才能でMS部隊員にまで上りつめた天才だ。

この話はそんな少年の部隊活動を見ていく話である。

? No・zero? あらすじ(後書き)

感想やおかしいところなどあれば遠慮無く言ってください！  
評価も付けられるほどうまくなっていたらお願いします！。

? No・one? 急襲と対応

ジリリリリリリ

「よし、今は3時30分警備交代まで後30分か…。コーヒーでも飲んで行くか。」

今起きたこの青年はコピ砂漠の食料生産所に最も近い場所にある軍事司令部所属のMS搭乗員だ。

名はシンザイ・R・ベリス現在16歳で軍のMS部隊にまで上りつめた天才である。

今は3時30分、4時00分からベリスが工場の警備の順番だ。

「タグラ隊長！。交代の時間ですよー。」

ベリスはコーヒーを二杯飲んだあと少し休憩したが暇だったので少し早めに交代をしにきた。

「うん？ああ…そうか。そんな時間か。ベリス准尉後頼んだぞ、後アクライ伍長は？」

「まだ来てませんが、少し早めに来たので。」

「そうか。では後頼んだ。」

そう言つてタグラは眠い目をこすりながら寒い工場の玄関口にある警備室を後にした。

ベリスはまだ来ていないアクライのことを何も無い砂漠を見つめて待ったが交代の4時になつても来ない。

「准尉すいませんー。遅れました。」

やっと来たかと思つたらもうそれは交代の時間から5分もすぎているた。

「伍長何してたの？」

ベリスは今来たアクライに向かって皮肉の声を混ぜて聞いた。

「寝坊です。申し訳ありません。」

アクライは本当に反省しているのかわからないが、とにかく今は警備と思つてベリスはこれ以上聞くのは押しとどまった。

そしてアクライと話や本を読んでいるうちに次の交代時間まで30分を切った。

横を見るとアクライは爆睡していた、遅れてきた上に爆睡かと苦笑しながらも自分の荷物とアクライの荷物をまとめて交代の準備をした。

その刹那、遠くの砂漠でドカーンという大きな爆発音が聞こえた。

「ッ、敵か。アクライ起きろ敵だ！」

そう言つてアクライをお越しながらも無線でタグラに敵襲報告を終えたあと工場の真横の地下にある第4格納庫へ向かった。

タグラはベリスからの無線を受け取った後、12番隊員を全員起こして、一番近い第5格納庫へ向かった。

その途中軍事司令部から双眼鏡で工場の方角を見た。

そのとき、ふと警備室に人影が見えたので倍率を上げて見てみるとアクライがもう何がなんだかわからないという様子でオドオドしていた。

ハアと深い溜息を付きながらタグラは目的地の第5格納庫へスピードを上げて向かった。

その頃ベリスは愛機のバゼイドに乗り込んで全てのシステムを起動させたあとだった。

「シアン、出撃準備完了だ。」

それを聞いたオペレーターのシアンは「検討を祈るわ」と言つて少し微笑んで見せた。

「出撃準備完了。カタパルトへ移動します。」

機体がクリーンのアームでカタパルトへ移動していく。

「カタパルト接続完了。任務敵機撃墜。進路クリア。発進どうぞ！」

「シンザイ・R・ベリス、バゼイド出ます！」

ベリスは発信のGの衝撃が久々なので体が少しきしむのを感じたが  
実際はそれほどではない。

ベリスは発進してまもなく敵機のザドウ2機を見つけた。

その刹那後ろからハイザドウが後ろから切りかかってこようとして  
いた。

? No・one? 急襲と対応(後書き)

機体プロフィール

機体番号：HGMS02

機体名：バゼイド

所属：地球霸権軍

重量：10.6t

全長：16.2m

武装：バルカン砲

セルライフル

120mmマシンガン

セルサーベル

動力：A型セルコア

人物プロフィール

名前：シンザイ・R・ベリス

階級：准将

所属：地球霸権軍

搭乗モビルスーツ：バゼイド

身長：182cm

体重：74K

年齢：16歳

? N o . t w o ? 危険と援護

? N o . t w o ?

「オットオ！そうはいかないぜ。」

そう言つてベリスはバゼイドの腰に装備してあるセルサーベルを抜きながら

ハイサドウのビームサーベルをよける。

しかし敵もバカではないよけられると同時に間合いをとりサーベルが当たらない

ようにした。

するとベリスはセルサーベルを腰に戻しセルサーベルを抜く時に脚部にセルライフルを

取り付けておいたのでセルライフルを脚部から手にとった。

相手はすぐにビームライフルを盾から取り出したが刹那それが爆発した。

「なっ」と相手パイロットの声が聞こえる。

右を見るとバゼイド二型がスナイパーセルライフルを相手のリーダーの届くか届かないかの

位置で構えていた。おそらくそれが相手のライフルに命中したのだろう。

「はっ、まだまだ隊長としての腕は衰えちやいないぜ。」

その声はまさしく自信と誇りにあふれた12番MS部隊隊長タグラ中尉の声だ。

「さっすが隊長」と言いながら相手がハイサドウと援護に来たサドウがサーベルを引き抜いて

向かってくるのを確認しバルカンで敵の足元を打った。

敵機はジャンプして切りかかって来たがベリスには予想済みだ。

上に向かつてサーベルを突きさした。すると敵機は機体の向きを変

えようとしたが  
時すでに遅し、そのまま敵機のサドウ一機はサーベルにコクピットを貫かれた。

「うああああああ……。」と敵のパイロットの声が聞こえたがその声が終わるか終わらないか

に敵機は電子音と共に爆発した。

ベリスは爆発に巻き込まれまいとするが、相手の機体の重量もあつてうまいように

機体が動かなかったので敵機の爆発に巻き込まれた。

そのままベリスのバセイドは動かなくなった。

それを見たタグラはマシンガンでサドウのもう一機を撃墜した。

その後敵のハイサドウは後退して行った。

「……うう。」

ベリスは自分のうめき声と共に目を覚ました。

まだ力が入らない体で横を見ようとした。

すると「まだ動かないでくださいよ。」と言う声が飛んできた。

声がした方を見ると医者ニコバ・サリーが紅茶を飲みながら資料をあさっている。

「ああ……俺どうなったんだっけ」

とベリスサリーに聞く。

「貴方のとこの隊長から聞くところによると、敵機の爆発に巻き込まれたみたいですね。」

心配しなくても大丈夫です足を打撲した程度の怪我ですから。明日には部隊活動に戻れますよ。」

と微笑みを浮かべてサリーは返答した。  
その刹那病室のドアが騒がしく空いた。

「ちょ、まだいいところだったのに。」

「もういいだろ、我慢できん。」

「もう、隊長はー」

とMS部隊の隊長と退院4名ほどが入って来た。

サリーは顔を赤くしていたがすぐに真顔に戻り「からかわないでください」と

隊長たちを叱った。

全く…とベリスは苦笑しながらまだ笑っている隊長たちに顔を向けた。

「それでなんですけど、隊長。」

「ん？なんだ」

タグラはまだにこやかな顔をこちらに向けながら聞き返した。

「相手はミノフスキー粒子を散布していませんでしたよね。」

「ああその件なんだが…」

タグラは一気に真顔になって答えようとした。

? No . t w o ? 危険と援護（後書き）

人物紹介

人物名：イシガイ・P・タグラ

階級：中佐

搭乗機：バゼイド二型、バゼイド

所属：地球覇権軍

身長：170cm

体重：75K

年齢：29歳

機体プロフィール

機体番号：UCKS M01A

機体名：サドウ

所属：宇宙C / T軍

重量：10.6t

全長：15.3m

武装：バルカン砲

ビームライフル

ビームサーベル

バズーカ

作者の呟き（ゲスト、ベリス氏）

作者「うあ、今日も誤字ばかり…」

ベリス「仕方ないだろ、そういう才能があるんだから」

作者「…ちよつと君後で体育館裏に集合」

ベリス「行ってもいいが、仕事が忙しいので…【だが断る！】」  
作者「よろしい、ならば戦争だ」

二人「自作もよろしくお願いしますー！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8155y/>

---

機動戦士ガンダムコピ砂漠第12司令部MS搭乗部隊

2011年11月27日04時13分発行